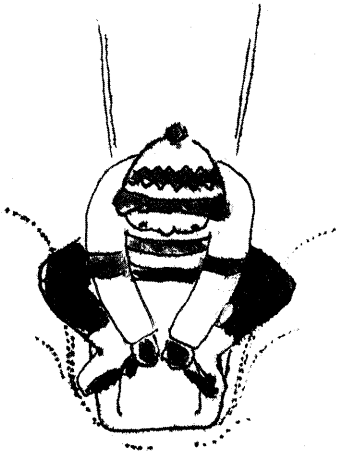


第三十三回

「現代」のふくみ

堀内 守



時間の伝説

その人が現代に生きていたら、いちどでいいから会ってみたい。そう思える人の名前を並べてみた。

現代は奇妙な時代で、テレビでよくお目にかかるタレントさんや有名人にいちど会ってみたいという人がいる。実際に会ったとする。

感想の中心にあるのが、「あ、やっぱりテレビで見たとおりだ」というものだろう。それは、「やっぱり」というところに力点がある感想である。「とおりだ」というのは安心感を物語る。

こちらの方は少なからず別のことを考えている。平凡な「やっぱり」では面白くない。「見る」だけで、姿かたちが「テレビで見ているのとおんなじだ」と安心するだけではつまらない。何よりも、語り合ってみたい。叱られるかもしれない。門前払いを受けるかもしれない。それでもかまわない。

会ってみたい人のリストには、孔子様だの、キリスト様だの、ソクラテス様だの、二百人余の名前があがって

いる。いずれも立派な人たちである。あまり有名でない人のリストもある。魅力のある人名もある。

これらを目の前の紙に書きつらねて、いろいろ想像しているうちに、ふしぎなことに気がついた。この所行自体が少なからず「こどもこども」しているのだが、書かれた方の人たちも、どことなく「こどもこども」している——そう思えてきた。

ひそかに慮^{おもん}みるに、この「こどもこどもしている」という表現はなぜ成り立つのだろうか。

二百人余の名前を眺め、その名のまわりに集まってくるさまざまなイメージについて戯れているうちに、「こどもこどもしている」ということは、学問的な分析をのがれ、勝手に動きはじめた。

たとえば、このリストの中には十六世紀から十七世紀にかけて、せっせと辞典編集に熱中したセバステイアン・コバルビアスの名がある。大変な碩学^{せきがく}で、部厚い（というよりも膨大な、というべき）辞典を著した。この人に会ってみたいと思ったのは、彼にはこんな話が伝わっ

ているからである。

彼が日夜熱心に辞典の原稿を執筆していたときのことで。途中で「時間」ということばにつき当たった。これを何と表現していいかわからなくなった。いろいろ考えたあげく、このむずかしいことばを説明するには古^{いにしよ}の人が書き残した文章を参照するのがっとり早いという結論に達したというのである。そこで、いろいろな先人たちの書き残したものを調べはじめ、とうとう「時間」の定義の複雑さにサジを投げたという。

「こどもこどもしている」とは、たとえばこういう人をさしている、と考えてみる。

すると、コバルビアス氏の思想と行動が一段と愉快に描けるのではないか。早い話、辞典を編集するという仕事は、今日でもそうだが、労多くして、それこそ時間との格闘のようなところがある。性急な人、短気の人には無理だ。どこか執拗で、粘着力があり、要するに、「しっこい」人でないとつとまらない。この「しっこさ」が、ある限度を超えると、定義の定義、そのまた定

義のように、先へ先へとつき進んでみたくなるのではないか。

ただし、この「しつっこさ」は、オリジナルな仕事には向いているのだろうか。コバルピアスは、参照につぐ参照をし、注をつけているばかりで、オリジナリティのある本が書けない人に似ていないか。そんなふうに考えてみる。すると、「こどもこどもしている」というのは、ある逆説を秘めているのがわかってくる。つまり「こどもこどもしている」のはオトナの方なのだ。まじめの上にもまじめで、そのまじめさを自分で気づいていないような、滑稽な人に転じてしまうのである。

幕間

さて、そのコバルピアス氏は、「時間」についてピタリとした記述ができないのに気がついた。そこで、彼は、紀元前二世紀のローマの最大の人文学者のひとりであるウァロ氏の文章を借りることにした。

そこにはこう書いてある。

「時間は世界の運動の幕間なり。時間はとりわけ太陽と月の運行によっていくつかに分かれたれている」

ローマの人文学者というところにこだわらないでこれをごらんいただきたい。いくつかのむずかしいことはを少々くだいてみると、今日でも通用しそうなことが書かれているのがわかるであろう。これは、いかめしい定義でも何でもないのである。

少し「こどもこども」した表現に直させていただく。

第一の型 「時は世の中の動きの幕。太陽さんとお月さんの動きで歳月が生まれる」

第二の型 「時は芝居の割りつけ。お日さまとお月さまが割りつけてくれるもの」

第三の型 「時は世界の時間割。陽と陰の力で歳月を生む」

このように、「こどもこども」した方法で少しずつ変換していくと、何のことはない、今日の私たちの心情の深いところにある時間論とどこかで共鳴するのがわかってくる。

コバルビアスさんの貢献は、彼があちこち文献を渉猟し、今日の私たちに面白い表現をたくさん残してくれたことである。そして自分の辞典に『宝典』と名をつけた。

すごい名前だ。一方では感心していただいでよろしい。しかし、次の瞬間、こんな表現は、ザラにあったということにも目を向けなければならぬ。実際、この表現は今日でもよくお目にかかる。

そう思って、よく見ると、「宝典」は、今日でもそれほどの衝撃力を与えないのではないか。

でも、わが編集した辞典に『宝典』と名をつけたコバルビアスは得意だったようだ。なぜか。それは彼が異教の詩人や哲学者の書いた文章や詩を引用し、密度の濃い注釈をつけたために、その時代の多くの人びとがこの辞典を重宝な辞典として使ったからである。

いま、なに気なく読まれたはずの「重宝」ということばにも「宝」という文字が使われている。そのいわれは今日ではほとんど知られていないし、問おうともしない

が、もともとはコバルビアスさんのような人が苦心して編集した辞典をありがたく使わせていただく気持から生じた。今なら「便利な辞典」が売りものになるのだが、昔は「重宝な」が、ことばどおり生きていた。

とはいえ、その辞典を使うたびに、いちいち編者の名を唱えて感謝して使ったというようなことはなかった。心の中で、ひそかに感謝するだけでもよかった。

コワイ時間

「時間」の定義は、あるところから先へいくと、よくわからなくなる。最大の難物なのである。そこで、どちらかといえば、時間の定義よりも、時間をどのようなものとして感謝していたかの方が面白い話題になるのである。

古典ギリシアやローマの神話などは、あきれるほど豊かな時間論を提供してくれるが、傑作なのは「時間」がコワイ姿で表現されていることである。

羽毛が生えている。裸である。杖をついている。その

くせ飛翔する。自分が生んだ子どもを食べてしまう。気づかれぬように世界に迫ってきて、全世界を苦しめる。

靈感を受けた人びとは時間をそのように描き出している。首尾一貫していないところが「こどもこどももしていて」面白い。

右の時間の姿かたちには、異教徒ばかりでなく一般大衆の感じ方も大いに「重宝」がられて使われていると見てよい。信念や祭礼などにかかわりのある痕跡は、そういうさまざまなたとえばなしの中に脈うっている。迷信的で非難されるべきもののカタログがその中にひそんでいると見てよいだろう。

ルーベンスやゴヤの描くところのクロノスの姿やサトゥルヌスの暗く恐ろしい姿は、学校の教科書には盛り込まれていないおどろおどろとした世界の存在を暗示しているが、宗教的情動の姿はこれらと共鳴するところが多いのである。

青年時代は、こういう共鳴から身を遠ざけ、できるだけ合理的に処理しようと努める時代である。だからこう

いう恐ろしい姿に対してはつねに懐疑的な姿勢をとる。個人的にもそうだ。団体としてもそうだ。

だが、人間の存在という観点から見ると、死と生が交替したり、陰と陽とが交替したり、運命が力をふるっているように見える。こういう面は、劇的によるこびや悲しみを体験する現実としてあらわれる。死と生、よろこびと悲しみ、失意と輝き、寒さと暑さ、これらはいずれも多様なできごとが生きられている場にほかならない。

信念の広がり

明晰で、透明な、とは理論についてのほめことばである。明晰過ぎて、味もそっけもないような理論もある。もちろん、味のある理論もある。その場合の「味」は、単なる明晰さを超えて、私たちが人間を包み込む抱擁力のある理論であろう。

愛とか悲しみとかに心動かされなかった人間はいない。それなのに、あたかもそれがなかったかのように、「冷静」であることが理論を生むのだというのは、ここ

二百年ほどのあいだに生まれた考え方である。むしろ、たえず、また繰り返して、愛とか悲しみは問題になる。個人的にもそうであろう。また集団的にもそうなのではないか。

こういう面まで含めて考えないと、喜びの日や祝いの日がなぜあるのが説明できない。また、妬みや敵意などを集団的に許す日を設ける意味はわからないであろう。「理解」ということは、「理」に「解」と書くが、その具體的でないなみは、その文字面の意味よりも深く、情念のレベルにまで届いている。

あのコバルビアス氏は、言外にはほ右のようなことを示唆しているのだ。だから会って語ってみたい人の一人に挙げてみる。

あえてこういう「子どもこどもした」試みをして、ひとりで悦に入っているにはそのほかにも理由がある。

どうも、このコバルビアス氏の考え方は、時空を超えて、日本の、山の中の小さな町に言い伝えられたもろもろの事柄に似ているのである。端的にいえば、私が子ども

もの頃聞かされた宇宙論に近いのだ。佛教——といえるほど体系化していない信仰、もろもろの親しみある神々と邪神が共存していて、どこにもいつでも神々がいた。一年中、どの日もかならず意味を与えられていた。

「きょうは何の日」「明日は何の日」と問えば、答えがちゃんと戻ってきた。だれだれの誕生日というような場合よりも、悲しみの日と馬鹿騒ぎの日が続き、日頃さえない顔つきの人が急に人気者になり、若い者に下知しているクリーダー格に変身することもあった。

しきたりを熟知している老人が、おごそかに場の雰囲気気を盛りあげてみたり、子どもたちが突如高貴なしぐさを演じるように教えられたり。

いちばん変なのは、こういうものが忘れ去られたというよりも、それを忘れてしまったのだということをおぼれているということである。

だから、コバルビアス氏に会って、語り合っているうち、自分の心のどこかにまだ眠っているはずのことが引き出されてくるかもしれない。いや、その可能性は十分

にある。

別の理由もある。

コバルビアス氏に会って、あれこれ話はずんだとすると、この碩学のことだからきつと、古代から中世の有名な人たちの書き残したものについて説明したあと、きつとこちらに向かい数々の問いを発するに違いないのである。その質問を想定してみるのも「こどもこどもしてゐる」ことかもしれない。だが、相当の努力を要するこどももある。

かりに、氏が私たちに向かつてこう質問したとしよう。

「やあ、二十世紀の人よ。そちらの世界では、私が苦心しても説明しきれなかった『時間』というテーマはどのように展開されているかね」

あれこれ、考えたあげく、この答えを練り直し、コバルビアス氏にわかるように噛みくだいて説明することが必要になるのだが、たぶんそう歯切れのいい答えにはなるまい。あげくの果て、私たちは、コバルビアス氏が、

げげんな顔つきをしたり、苛立ったり、ふしぎがったりするのに出会うことになるろう。

もし、氏がニッコリと笑ったらどうなるか。その「ニッコリ」は、「わかった」という意味のニッコリなのか、それとも「二十世紀の人にもできないのか」という「してやったり」式の笑いなのか。どうも後者のような気がする。

メモ魔

コバルビアスの記述しているなかでいちばん面白いのは「カーニバル」についての記述であろう。まったく、この記述魔のごとき、メモ魔のごとき人物は徹底してカーニバルの起源、意味、数々の行事、そのい、われ等についてこつてりと書き記しているが、実は私たちから見れば、そこに記されているのは、生き生きとした子どもの遊びにはかならないと読める。たとえば、コバルビアスは、同時代のマドリード（申し遅れたが、彼はスペイン人である）の下町のカーニバルについてのべながら、女

の子たち特有の遊びについて説明している。それによると、女の子たちが、通りを行く人たちに爪先立ちで近付いて、棒切れあるいは紙切れの端をくっつけ、そうしながら次のようにうたうというのである。歌の文句は

棒っ切れをよこしてよ

子ロバが広場に

持っていくよ

と、いうようなハヤシコトバになる。

あるいはまた道化の衣装について記したり、子どもたちが顔に墨を塗り、ブリキ罐やゴザを引っぱりながら、思いつきり大きな音をたてながら町をねり歩くこと、同時にオトナたちも爆竹を鳴らし、土鍋や罐を鳴らしたりすると記している。その記述は淡々としているというよりは、あちこち余分なところに入りこみ、横道にそれ、あるできごとの起源に進んだり、別の考証の引用になったりして、それ自体が迷路のように入り組んでいる。

性急な人は、コバルピアスの記述をいかげんなところで放り出してしまふかもしれない。腹を立て、この著

者の文章はなっちゃいない、と怒鳴るかもしれない。

でも、それはもったいない。このゴタゴタした、ごった煮のような記述のなかには恐るべき視点が感じとれるのだ。それは、平板な記述に甘んじないという姿勢である。謎解きを楽しんでいるようなところもある。現にコバルピアスの記述のなかには「余分な記述」と片づけるにはもったいないような象徴的な記述が光っている。たとえば、土鍋を割るといふことの象徴的な意味について、彼は、あちこちの地方で行われている習慣を書き並べ、サモラでは教会の天井から水瓶を吊るし、それが天井にぶつかるまで勢よく揺るとのべたあと、その意味の考証に移る。見たところバカバカしいような所行のあいだ信者たちは口々に唱えごとを口にし、自分たちの弱さに思いを致すというのである。

傾聴すべきことばではないか。ドンジャカ騒ぎは、人びとが自分の弱さに思いを致すことに通じているのである。とすれば、この歴大な記述自体がコチコチの人になることでではない。コチコチの学者然たる人物ならもっ

と系統的に分類を試み、横道にそれるようなことはしないだろう。むしろ、コバルビアスは、この膨大な著作を通じて、ただ一言「人間の弱さに思いを致す」ことを試みているのではないか。

だから、彼の記述はきまり切った枠をはずれてしまい、気のおもむくままにはみ出していく。そのはみ出し方は偶然とはいえない。

やさしさ

知をひけらかすことに近く、いろいろ調べたことを並べてみせるような場合がある。かと思うと、道路の交差点でどちらへ行こうかと迷い、あるいはどちらの説に軍配をあげようかと迷っている子どもの行司のように見えることもある。

人間の弱さを承知の上であれこれを眺めてみることによってコバルビアスは、子どもとオトナがそれほど差異のある存在ではないというメッセージを発信している。

小憎らしいような文章もある。世の中の諸悪を糾弾す

るとき、人はかならず自分を正義の味方の側に置きたがる。だから、それに思いを致す必要があるというのだ。相当しなやかな人でないと言えないことばではないか。またそれを一般化して、人間の弱さは、自分を無意識のうち例外に置きたがることだと言っている。例として挙げられているのが次のような祭りだ。



スペインには聖アゲタ祭りがある。聖アゲタは三世紀のシチリアの聖女でアガタとも呼ばれるが、彼女の殉教の有名なエピソードが両胸を切り取られたというところと、その後天使によって胸が癒されたというエピソードである。

授乳する女たちの守り神となり、また胸の病いの守り神ともなった。だから、この祭りの日には女たちは元氣よくグループに分かれて、踊ったり、喜捨集めをしたり、敬虔な人のひんしゆくを買うような装身具を身につけたりできる。多くの町では、男たちはアンジュラスの鐘が鳴るまで家事一切を引き受けなければならぬ。

この「一切を引き受けねばならない」ということの違いの例がずらりと並べられている。からだの調子がよくない、急用ができた……すべて私たちにとっておなじみのものばかりである。だが、コバルビアスはこれらを記述したあと、こんなに人間は自分だけを例外にしたいと考える悪知恵も持っている。ならば、その弱さに思いを致し、大らかに足もとを見つめ直そう、と。

彼の記述のすべてが人間をそのような目で見ているように思えてくる。まず第一に訊ねてみたいのは、「コバルビアスさん、あなたは子どもが好きですか。いまの自分のなかに子どももしたところがあると気づいていらっしゃるんですか」という質問だ。

この質問を、ソフトもソフト、超ソフトでたずねてみたい。きつと、何時間ものおしゃべりとなるだろうと思う。

(名古屋大学)